



路上の自動販売機と 公園のイス

(財) 地方公務員等ライフプラン協会 篠田 良子

「百」

聞は一見にしかず」は学校で最初の頃に覚えたことわざだった。「繰り返し他人の話を聞くより、実際に自分の目で確かめたほうがよくわかるという意味」などと書いたら野暮ってものだろう。

私が初めて海外へ行ったのは19歳最後の日だった。恐る恐る乗った飛行機で向かった先はフランス。廃止直前のアンカレッジ経由で日付変更線を越え、20歳の誕生日を二度迎えた。インターネットがなかった時代、本や映画、周囲の話から訪問先の情報を仕入れていた。街の様子、食事の際のチップ、スリに注意しなければならないこと…。

実際、足を踏み入れてみるとすべてが新鮮だった。だが、一番驚いたのはもっと些細なことだった。

一つは路上に自動販売機がないこと。もう一つは、公園にイスがたくさんあること。「路上の自動販売機は現金を置いているようなもの」と聞き納得したが、その反面、一人掛けのイスは固定されるわけでもなく自由に移動できるようになっている。シンプルだけど小洒落たイスは、日本なら盗難が続出するのではないか。

日本とは真逆の光景を前に、この国における公園でのイスの使われ方を想像してみた——昼下がりのチュイリー公園。噴水に向かってイスを並べる初老のご夫婦。そこに犬を連れた女性がやって来る。初対面同士だが、犬の話題からご夫婦と会話が弾んでいく。もちろん、近くにあったイスに腰を下ろして…。



日常の中でコミュニケーションが生まれていく仕掛けが、自然に溶け込んでいく。そんなところに大きな文化の違いを感じた。コミュニケーションを大事にする文化においては、道ですれ違う際、ちょっと肩が触れただけで必ず「Pardon (すみません)」と一声掛ける。出入りの際、自分の後から来る人にも気を配り、軽くドアを押さえて待つ。待ってもらったほうは「Merci (ありがとう)」と笑顔で返す。そんな小さな思いやりが当然のマナーとして身につけている。そのことの素晴らしさは日本に帰国するとしみじみ実感する。

「言わなくてもわかって当然」に居心地の悪さを感じる場面は少なくない。満員電車内でのいさかいは日常茶飯事。コンビニではヘッドホンを付けたまま一言も発せずに買い物かごが済んでしまう。Visit Japanで訪れた観光客の目にはどう映っているのだろう。

そう言う私もコミュニケーションは苦手。いわゆる人見知りだと思う。そのうえ無愛想。だが、電車で人ごみをわけて降りる際には周囲へ一声掛けること、コンビニでは店員さんと少しでも言葉を交わすことを心掛けている。見ず知らずの他人には一声が必要だと思うから。

「袖振り合うも多生の縁」。今日は他人でも、明日どう関わるかわからない。そうでなくても、人はどこかにつながっている。異国の地で気づかされた、自国の先人たちの教えである。

